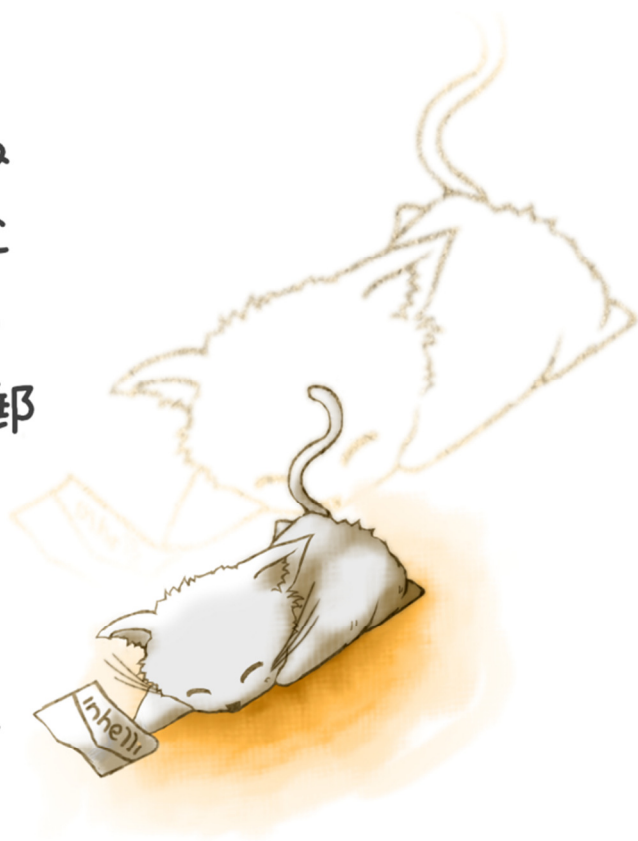


ねこの郵便屋さん





わたしが「うみ」と出会ったのは、よく晴れた夏の日のことだった。

メル 407 年パールの間、カテージュ市。

ディアセルの興奮からすっかり醒めたこの街は、いつもどおりのゆったりとした規則的なリズムを刻んでいた。

わたしは赤茶色の石畳を踏みながら、クレーヴェル通りを歩いていた。

夕方のモールはとても賑やか。買い物をしている女の、カフェで紅茶を飲んでいる学生たち、露天わきのベンチシートでおやつを食べている男の子。色々な人がいる。

「あついなあ」

手を扇のようにはためかせて顔を煽いだ。

そりゃそうか。カテージュはアルバザードの中でもかなり南の都市だもの。

けど、インサール地方と違ってアルバザードのあるアンシャル地方は、同じ夏でも暑さの質が違うっておじいちゃんが言ってたっけ。

ええと、たしかインサールの多くは夏は湿っていてじめじめしているんだとか。アルバザードの夏は乾いているから天国なんだって。

世界の人はカテージュの北にある首都アルナが最も住みやすいなんていう。だけどアルナ人に言わせれば、冬が寒いからカテージュのほうがいいみたい。人のものはよく見えるってやつね。

確かにカテージュは暑くてもそんなに汗はかかないし、ムレもしない。カラッとしていて過ごしやすいことはよく分かる。

それにしたってこの暑さはないんじゃないの？ 学校に行くのもおっくうになっちゃうわ。

もしかしたら、わたしの家が特別暑いのかもかもしれない。

ほら、カテージュの土地にフレアの季節な上、太陽神クレーヴェルの通りに住んでいるわけでしょ？

ああ、そうかもしれないなあ。

わたしはちょっと得意げになって「ふふふ」と笑った。

クレーヴェル通りのラヴァ通りに着くと、茶色い看板のパン屋に入る。

買い物に来たわけじゃない。ここがわたしのおうち。

「ただいまあ」

正面から入る。裏口からこっそり入れなんて言われぬ。そんな細かいこと気にする人はこの国にはいないと思う。

「おや、こよりちゃん、おかえり」

常連のおじちゃんに声をかけられる。銀色のトングをカチカチして、わたしの目を引く。

「ただいませす。いらっしやいです」

わたしが挨拶すると、おじちゃんにはっこりしてトレイに目を戻しながら話を続けた。

「学校の帰りかい？ 今日暑かから駅からここまで大変だったろう」

「ほんと暑くて。海に行くにはいい日ですけどね。あいにく今日は学校だったんで」

「そうかい、そうかい。あ、こよりちゃん、そういえば今いくつになったんだい？」

「アルソンです。こないだ14になりました」

「じゃあもう高校卒業だね。受験するんかい？」

「はい、中央カテゴリー大を目指してます」

おじちゃんは満足げに頷いて、「がんばってね」と言ってくれた。

するとレジに立っていたお母さんがにやあつとして、「目指すだけで終わるんじゃないでしょうねえ？」と言った。

「ちゃ、ちゃんと勉強するよお……」

お母さんは腰に両手をあてる。

「どうだか。ねえ、この子ったら絵ばっか描いてるんですよ？」

「ははは」

おじさんは軽快に笑う。

「も一、お母さんのいじわる」

わたしは赤くなって奥へ引っ込んだ。

うちは1階がパン屋で、2階が住宅になっている。いわゆる南区に住む商人の娘ってやつね。

ひとりっこで、お母さんとお父さんとおじいちゃんがいる。4人家族だ。

自分の部屋に上がる前に厨房に顔を出す。お父さんがパンを焼いていた。

「ただいま、お父さん。おじいちゃんは？」

わたしは大のおじいちゃん子だ。いつもおじいちゃんの周りをうろちよろしている。

お父さんのことも好きだけど、おじいちゃんは色々なことを知ってて、面白い話をたくさんしてくれる。

「おかえり、こより。じいさんなら裏手だよ」

「わかった。着替えたら手伝いに降りてくるね」

「ああ、頼む」

お父さんはあまり喋らない人だ。大人しい男の人なんだって。

でも、パンを焼くのはおじいちゃんと同じくらい上手。

とてとて階段を上がると、部屋で制服を脱いで作業着に着替える。

うちは小売店だけど、仕入販売じゃない。商品をお店で作って売っている。だからパンの味と質と信用でお客さんを得ている。

小麦粉などの生産者さんと良い取引ができれば、あとは自分たちがいかに良いパンをお客さんに提供できるかの勝負なのだ。仕入販売の肉屋に比べて、自分の腕が物を言う仕事だ。

——っておじいちゃんが言った。よく分からないけど。

まあ、とにかく誠心誠意いいパンを作っていこうということよね、たぶん。

それに、アルバザードは食の安全にとっても気を使う国だしね。

前の執政官のミロクさまが衛生管理をきちんとしてくれたおかげで、わたしたちは安全なものが食べられるんだって。

だからミロクさまに感謝しなさいってよくお父さんたちは言ってる。

作業着に着替えた私はとんとんと階段を下りていった。

裏手に回ったが、おじいちゃんはいなかった。

あれ、厨房に戻っちゃったのかな。

わたしは勝手口を閉めようとした。

とそのとき、白い布が地面に落ちているのに気付いた。

チラっとその布に目をやったわたしは驚いた。だってその布、動いたんだもん。

「わ」

よく見たら、それは布じゃなくて白い猫だった。ふわふわしてる。

「ねこちゃん、こんにちは。何してるの？」

猫はわたしに気が付くと、くるっと回って低い姿勢で地面に手足をつけ、上目遣いで私を見た。

心なしか震えている。何だか怯えているみたい。前脚をそろえて、その上に顔に乗っけるような形で低姿勢を保っている。猫特有の、いつでもダッシュできる体勢だ。

「別になにもしないよ」

って言っても分からないだろうから、近寄らないことにした。

外のごみ箱を開けて、中を確認する。よし、まだ溜まってないね。

猫はじーっとわたしを見ている。

「あの……ねこちゃん。もしかして、ごみ箱のハムがほしかったの？」

うちは食糧の廃棄はなるべくしない。ただ、100個作って100個売れるわけじゃないのも事実。

余った分は炊きだしに使う。炊きだしに出せないものは飼料にする。

中には飼料にさえならないものもある。傷んだハムとか、腐っちゃった野菜とかね。

そういうのはお店の裏口にあるごみ箱にまとめておく。

そしてノラ猫はそういうのを狙って生活しているそうなのだ。

多分このねこちゃんも、そういう生活をしているのだろう。

人によってはノラ猫を処分するなんていうこともあるみたいだけど、わたしは……いやだなあ。それはかわいそう……。

ごみ箱の中から、できるだけ悪くなってないハムを出し、傷んだ部分を捨てて猫のそばに置いた。

猫は目を細めていぶかしそうな顔でハムを覗んだまま、しばらく固まった。

「いまのうちにデッサンできるかなあ……」

でも、道具持ってくる間にいなくなっちゃうだろうな。

猫は鼻を近づけると、ゆっくりハムに近付いていった。

そして確認するようにハムを嗅ぐと、はぐはぐと食べた。

ときおりチラッと警戒するようにわたしを見ながら食べている。

「あちゅでちゅか？」

猫は一心不乱に食べている。

「キミ、おなかですいてたんだねえ」

猫らしくというか、食べ終わったらお礼もなくさっさと去っていった。

次の日。

学校から帰っていつものように家の手伝いをしていたわたしの元に、また同じ猫がやってきた。

「お、よく来たね。昨日ので味をしめたのかな？」

すると猫は初めて「うみい」と鳴いた。

「可愛い声で鳴くね。てことはキミは男の子かな？」

わたしはさっき床に落としちゃったサラミを手に載せると、猫の前にはずいっと差し出した。

「さあ、ねこちゃん。食べてみよ」

猫は手を出したわたしに一瞬ビクとしたが、逃げなかった。

かといって近寄るわけでもなかった。どうやら警戒しているらしい。

「根競べかなあ？」

こうなったら日が暮れてお母さんにプーブー言われるまでここで猫と競争しようと思いついた。

じーっと手を出すわたし。サラミとわたしを交互に見る猫。

だけど結局猫はサラミを食べず、去ってしまった。

「残念……」

わたしはパンパンと埃をはたいて、立ち上がった。

次の日も猫は来た。  
「懲りないね、キミも」  
「なー」  
「あ、懲りないのはわたしもか」  
「うみい」

「そうそう、キミに名前をつけてみたんだ。『うみ』ってのはどう？ キミ、そうやって鳴くからね」  
分かってるのか分かってないのか、うみは鳴く。

今日のわたしの武器はハム。  
もしかしたらサラミは好みじゃなかったのかもしれないし。  
「おいでおいで」  
手のひらに載せるんだけど、近寄ってこない。  
やっぱり距離の問題なのかなあ。

試しにハムを地面に置いてみた。わたしの近くに。  
するとしばらくして寄ってきた。  
こちらを警戒しながらも、うみはハムを食べた。

「やったやった♪」  
サラミを取り出すと、手に載せた。  
うみはいぶかりながらも、わたしの手に鼻を近づけた。  
わたしはちょっと緊張して黙っていた。  
なんだか声を出したら逃げてしまいそうな気がして。

優しくうみの頭をなでる。  
はじめはビクっとしたんだけど、逃げることもなく、撫でているうちにゴロゴロ喉を鳴らした。  
「ふふふ、また明日もおいで」  
背中をとんとんとすると、うみはててと歩いて去っていった。



次の日は休みだった。

パン屋の朝は早いと思ったら大間違い。

あ、でもおじいちゃんのころは早かったそうよ。なにせ、午前にお店を開けるまでにパンが焼けてなければならないんだから。

けど今は違う。朝になってからパンを買う人なんていない。パンは前日に買っておく。

朝食用にパンを買う人がいないから、パン屋が開くのはお昼時と相場が決まっているの。

だからお昼までにパンが焼けてればいいわけで、パン屋の朝は決して早くないのだ。

うちはクレーヴェル通りのラヴァ通りにあるから、お客さんは地元の東区の人が多い。

ちょっと高い、質の良いパン屋さんよね。ほら、東区の人はお金持ちだからさ。

リディア通りだったら北区からのお客さんも来てくれるんだけど、うちは北区からは遠いから、お昼休みに買いに来るサラリーマンはいない。

逆にクミール通りだったら隣の市の学生やサラリーマンで賑わうんだけど、それとも異なる。

ラヴァ通りっていう中間層にあるからこそ、うちのお店は地元のお客さんが多い。

すぐそこに住んでるおじちゃんとかおばちゃんとかが買っていつてくれるから、みんな顔なじみ。

わたしのことは小さいころから知ってるし、気にかけてくれる。

5歳のときにわたしがこのあたりで遊んで迷子になったときも、すぐ近くのおじちゃんが助けてくれた。

わたしが「ラヴァ通りのパン屋のこより」だってことは、みんな知ってるからね。

正午すぎ、裏手に出ると、うみが来てた。

うみに挨拶したけど、鳴きもせず、脚で顔をかいていた。

でも、わたしにはもう慣れたみたい。

作業をしていたら、裏口から勝手に中に入っていった。

「うみ、入ってもいいけど、厨房周りは絶対だめよ。わたしにはお客様の衛生を守る義務があるんだから」

「なー」

「.....わかってるのかな」

案の定、1分もしないうちにお母さんの「こよりっ！」という叫びが聞こえた。

「にやあ.....」

厨房にまさに入らんとしていたうみを確保したわたしは、休憩をもらって自分の部屋に行った。

「あそこは入っちゃだめよ。わたしの部屋はいいけど」

うみは腕の中でじっとしている。

そういえばうみを抱いたのは初めてだなあ。ふわふわのもこもこ。

「この作業着、替えないとな.....。それにしても、キミ、ずいぶん汚れてるねえ」  
しげしげとうみを見る。

「でも首輪をしているね。ノラかと思ったけど、放し飼いだっただね」

「うみい」

「ちょっと待ってて。ブラシしてあげる。外を歩いていると毛並みが悪くなるよね」

うみをブラッシングしたわたしは、ついでにうみと自分のエサを持ってきて食べた。

食事を終えたうみはわたしの部屋をうろうろしていたけど、やがて家を出ていった。

「またね」

うみは何も言わずに去っていった。揺れてる尻尾が面白かった。

うみはうちが気に入ったのか、それからしばらくうちの周りにいつくようになった。

わたしは気がつくごはんをあげて、毛づくろいをしてあげた。

だけど1週間ほどしたら、うみはぱったり来なくなった。

どうしたんだろうなんて心配していたら、また数日後にひょっこり現れた。

「あら、うみじゃない。おかえり。どこ行ってたの？」

うみは鼻を近づけて顔をすりすりしてくる。

わたしはうみの顎を3本の指で弄って、ごろごろ言させた。

とそのとき、ふと首輪に何かがついているのに気付いた。

「なにこれ……」

それは紙だった。メモの切れ端が首輪にくくりつけられていたのだ。

「キミ、何を拾ったのよ？」

メモを外す。メモは二つ折りになっていた。

そこにはこう書かれていた。

ねこ好きさんへ

毛並みをきれいにしてくれてありがとう。

ウチではこの子を「ももん」と呼んでいます。

「これ……もしかして私宛？」

うみが鳴く。

「キミ……ももんなの？ いくつも名前があるのねえ」

「なー」

「おなか空いたの？ ちょっと待ってね」

ドアを開けると中に入ってくる。

まるで家主のようにわたしの部屋に入っていく。猫だなあ。

わたしはハムを持ってきて、うみにあげた。はむはむ食べる。

食べているうみを横目に、わたしはメモを見ていた。

飼い主なのかなあ。放し飼いでいるのにある日毛づやが良くなって帰ってきたのを見て、よそで別の誰かにしてもらったんだなって気付いたのかも。

わたしはスケッチブックのはしっこを切り取ると、鉛筆でこう書いた。

ももの飼い主さんへ

お手紙ありがとう。

ウチでは「うみ」って呼んでいます。ハムが好きみたいですよ。

紙を二つ折りにすると、ハムを食べ終わってまったりしているうみの首輪に取り付けた。

「これで……もしかしたら届くかも……」

うみは首輪に手紙をつけて、うちから去っていった。

次の日。学校から帰ったわたしを出迎えたのはうみだった。

お母さんははじめはブーたれていたけどだんだん慣れてきたみたいで、家の中に入れてあげるようにしてみた。

もちろん厨房は締め切って入れないようにしたけど。

帰ったらうみがふつうにクッションの上で寝ていた。

「キミは外の埃をわたしのおしりに付けたいみたいね」

うみの首輪に目をやると、そこには紙がくくりつけてあった。

「あ……」

ちょっと心臓が高鳴った。

でも、もしかしたら昨日私が折った紙かも。

首輪から紙を外したわたしは口の端を上げた。感触がスケッチブックじゃない。ノートだ。

急いでメモを開いた。

うみの飼い主さんへ

こないだクリームをあげたら、凄い勢いで食べていました。お試しあれです。

あと、私はポエン通りのラヴァ通りに住んでいます。

「わ、わ。ほんとに返事が返ってきた。すごーい」  
なんだか嬉しくなって、わたしはまた紙を千切った。

わたしはクレーヴェル通りの同じ道に住んでいます。近いんですね。  
アルソンの女の子です。「こより」っていいます。  
ももの飼い主さんも、字を見た感じ、女の子ですよ？

相手の字は明らかに女の子の丸い文字で、しかも子供の字だった。お母さんの  
字とは違う感じ。

親近感を覚えたから、勇気を出して自分のことを書いてみた。  
相手が大人の男の人とかだったら、怖くて書かなかったと思う。

うみはぶらっと部屋を出ていったが、また1時間したら戻ってきた。  
「あれ？ 向こうに帰ったんじゃないのね」  
ところがうみの首には新しい手紙が付けられていた。  
「うそ。もう行ってきたの？ 1時間しか経ってないじゃない」

え……だってここ、ラヴァ通りよ？  
中央のカルテから見て15番目の円だから、けっこう広い半径のはず。  
どうやって1時間で2つも向こうのポエン通りまで行ってきたっていうの……。

……まあいいか。  
はやる気持ちを抑えながら手紙を開いた。

こよりちゃんへ  
うそーっ。私もアルソンなんだよ。  
名前はひなたっていうの。よろしくね。  
趣味は音楽です。こよりちゃんは？

モール住まいなんだね。お店が近くていいなあ。  
実はね、私、今たまたまモールにいたの。  
うみちゃんが歩いているのを見つけて、手紙を書いたの。

なるほど、それで返事が早かったのね。  
名前はひなたちゃんっていうのか。でも、ウチのクラスにはいないなあ。  
ひなた何ちゃんだろ。ユーマみたいなよくある名前じゃないけど、かといって  
珍しい名前でもないしなあ。わたしと同じアルティア系カテゴリー人なのかな。

趣味は音楽……かあ。ピアノとか弾くのかな。すてきな感じ。  
「あ、そうだ」  
机をごそごとと漁って、画材を取り出した。っていってもスケッチブックと鉛  
筆だけだけど。

うみはクッションの上で眠っている。  
疲れたみたいね。チャンス、チャンス。

鉛筆を握って腕を伸ばす。  
さらさらっと10分くらいでうみをスケッチする。  
クッションの上で丸くなって寝ている白猫のうみを描くと、ひなたちゃんに返  
事を書いた。

ひなたちゃん  
モールでももんちゃんに会ったんだ！？　すごい偶然！  
ねこの郵便屋さんってすてきね。

わたしの趣味は絵です。  
ももんちゃんの似顔絵を描いてみました。見てみてね。

うみの首輪に絵と手紙をつけた。絵は少し大きかったので四つ折りにした。  
絵が曲がっちゃうのはちょっといやなんだけど、しょうがないよね。  
それにしても絵と音楽って、この国じゃありきたりすぎる趣味だなあ。絵を描  
く人はアルバザードにはあまりに多いから。  
絵描きと楽器弾きは街のどこを歩いてもいるもんね。つまらない趣味って思わ  
れないかな。

わたしは脚をぶらぶらさせた。  
まあ、こっちも音楽をつまらないなんて思わないし、向こうもきつと同じだよ

ね。

前回の集荷は1時間で早かったのに、次の集荷はずいぶん遅かったようで、ひなたちゃんからの返事が届いたのは翌日の夜のことだった。

水を飲みに行こうと部屋を出たとき、うみの声が聞こえた気がして裏手に回った。

外は雨が降っていて、うみが軒下で「あけてにゃー」とばかりに鳴いていた。

「ほら、ほら、おはいら。さむかったね、よしよし」

わたしはタオルを取ってきて、うみを拭く。体をぶるぶるさせるうみ。

「ん？ ちょっと、キミ、何をくわえているのかな？」

うみは口に魚をくわえていた。

「これ……魚？ どっかから拾ってきたのね。え、猫って魚食べるの？」

わたしは顔を真っ赤にして笑ってしまった。

あははと笑っていたらお母さんがやってきた。

「なに大声出してるの、あなた」

「お母さん、ほらみて！ うみが魚なんかくわえてるの！ 肉と間違えちゃったみたい」

「あらあら、しょうがない子ね。でもカレンなんかじゃ猫が魚を食べるのはふつうなのよ」

「そうなんだ？」

「鶏肉のあまりがあるから、持ってきてあげるわね」

「うん、ありがとう」

お母さんはパタパタと階段を降りていった。

「おいで。わたしのクッションで寝ていいよ。あったかいから」

うみは尻尾を立てて付いてくる。

首輪には手紙がくっついていた。ちょっと雨に濡れてしまったけど、ちゃんと

読める。

「あ、本日の配達、ごくろーさまです」

手紙を読む。ちょっと字が掠れちゃってるけど大丈夫。

こよりちゃん

絵、じょうずー！ ビックリしちゃった。

うみちゃんの特徴がよく出てるね。

白猫を白い紙に描いても白猫の絵だって分かるのが、なんだか不思議な感じ。

絵を描く人っていつも凄いと思います。

わたしはすぐに返事を書いた。

ひなたちゃん

聞いて聞いて！

今ね、ももんちゃんが魚くわえて入ってきたの！

猫って魚食べるんだね。

あ～あ、写真撮ればよかった。

あ、ねえねえ、家が2つ向こうなら、そのうち会ってお話でもしない？

うちの近くにおいしいケーキ屋さんがあるの。

うみの首輪に手紙を付ける。

「では、配送よろしくおねがいします」

うみを撫でると、尻尾をぶらーんと振って返事をした。

「でも今日は一緒に寝ようね、うみ」

雨の夜が去った朝はすっかり晴れていた。

海の近くの空なんて、こんなもんだ。

——っていうのはおじいちゃんの口癖なわけで。

今日はおやすみ。



天気がいい。気分も最高。  
うみはごはんを食べたら、とことこ部屋を出ていった。

「お母さ～ん」  
わたしは厨房に顔を出す。  
「今日は海に行つてこようと思うの」  
「ああ、いつもの？ うん、いつてらっしゃい。気を付けてね」  
「はい」

するとお母さんは思い出したように付け加えた。  
「あ、宿題はやったのよね？」  
「や……りますよ？」

休日は週2日。この国ではみんなそう。  
前期大学生まではヴェルムとパルトが休みだから、5日行けば連休になる。

部屋に戻つて画材を集め、カバンに入れて外へ出る。  
「あついなあ」とか言いながら、最寄りの駐輪場へ向かう。公共自転車がたくさん停めてある。

左手のアンセをかざし、サイズの合う女の子用のピンクの自転車に乗つてカルザス通りへ向かう。

カルザス線のラヴァ駅付近の駐輪場に自転車を止め、自転車を国に返却する。  
駅に入り、正面アーチを通過し、ホームへと降りていく。  
ラヴァ駅は急行が止まらないから、緑の電車で南カテゴリーの南端へ向かう。

地下鉄はほとんど音も立てず、静かに進んでいく。  
あつという間にクミール駅に着くと、鞆を抱えて階段を上がる。  
地上に出ると急に強烈な日差しを受けた。

日焼け止めクリームを塗り直すと、外へ出る。  
麦藁帽子を深くかぶる。  
今日は白のワンピース。お気に入りの服。気分、最高。

わたしの目的は泳ぎじゃないの。

貝殻を集めにきたわけでもないのよ。

絵を描きにきたの。

海岸を訪れた人たちの似顔絵を描く。

これがわたしの休日の過ごし方。週に1回はこうして過ごすことにしている。

歩いて海岸へ向かう。

行先は籠女海岸。

時間はお昼前。

大人は休日となる曜日が決まってない。まあ少なくともパルトは休みっていう人がほとんどだけど。

休日が固定してないから、どの場所も一斉に混雑することがないし、逆にガラガラでさびしいということもない。

常に心地よく空いていて、かつ、どこもさびれていない。

「よっこいちょ」

波打ち際からちょっと離れたところにシートを敷いて座る。

「風が気持ちいいなあ」

画板と電子ペーパーとペンを取り出す。

画板を抱えて三角座りでぼっと海を描く。

おじいちゃん曰く、これがアルバザードの絵描きだ。

わたしたちは「似顔絵描きます。一枚〇〇ソルトです」みたいな看板は立てない。

そういう商魂たくましいことは恥ずかしいことだとおじいちゃんがいつも言うてる。

ただ、ぼっと周りの景色を描いている。

あと、お客さん用の折り畳み椅子を置いておく。この椅子があれば似顔絵師だってことが分かるから。

こうしないと、ただ景色を描いているのに似顔絵描いてって話しかけられて困っちゃうからね。

アルバザード人は芸術が大好き。

首都アルナには世界一のランスケルン美術館があるくらいだし、アルバザード人に並べるとしたらエルトア人やルティア人くらいのものじゃないかな。

こうして休日に絵を描いていると、たいていお客さんが寄ってくる。

多くのお客さんは友達と来ているか家族と来ているか、あるいは一人で来ている。

一人きりのお客さんは暇をしていることが多い。

アルバザード、特にカテージュ地方は人懐っこくて気立てのいい人が多いから、似顔絵師を捕まえて雑談するのだ。

一人で来たお客さんは暇つぶしに絵描きに話しかける。そして世間話を楽しみながら、絵を描いてもらう。

絵描きも会話を楽しみながら趣味をして休日を過ごすというわけだ。

大体話しかけてくるのは同じ年代の人が多い。

みんな雑談をしにくるから、話題の合う世代が良いってことみたい。

ぼーっと海を描いていたら、長袖の女の子が声をかけてきた。

「こんにちは。いいですか？」

案の定、わたしと同じくらいの年の子。

黒い長い髪の毛、おとなしそうな子。セミロングで茶色い髪の毛のわたしとは対照的ってほどでもないけど、静と動の違いはあるかも。

「はい、どうぞどうぞ」

にこりとして椅子を勧めると、女の子はすっと座った。

「何か飲みます？」

ポットにお湯を入れ、お客さんに提供するのがホスト側の礼儀。

水分がないと話しづらいもんね、とくに夏は。

お茶のティーパックも持っているから、お湯以外にもいろいろ提供できる。

「あ、それじゃあお湯を。ごはん前なので」

「はい」

お湯を差し出す。

「整った顔ですね。髪もすごく綺麗。肌も白いし」

わたしはカテゴリー住まいでも周りと比べて色白なほうだが、彼女の肌は透き通るように白かった。

「インサール系ですよ。クミールに似てるって言われませんか？」

「そんな」

女の子は赤くなって手をぶるぶるさせる。

「紙がいいですか？ それとも電子ペーパー？」

「あ……ええと、じゃあデータで」

「はあい」

私は電子画板を取り出す。

「あの。そういえば、データと紙って、どっちをほしがる人が多いんですか」

「そうですね。やっぱりデータですかね。紙は帰りの持ち運びも困るし、その後の保管も困るから」

「ああ、なるほど」

女の子は頷く。

「絵は長いんですか？」

「物心がついたころには描いてました」

「へえ。じゃあ、そのころ電子画板も買ってもらったんですか？」

「うん。うち、おじいちゃんが絵を描くから、おじいちゃんのを使わせてもらってました。自分のはミルギに上がったときかな、お祝いで」

「それでも十分早いですよ。なんだか、すごい……」

「ふふ」

「でも、今は電子画板があるから楽ですよ。おじいちゃんのところは大変だったみたいで」

「へえ？」

「ええとね」わたしはいったん手を離す「こういう四角い板があつてね」

「うん」

「板には何も書いてないの。そこにペンで絵を書き込むのよ。っていっても実際

にペンで板を彫るんじゃないくて、ペンで板に描くフリをするの」

「何も書いてない板に？」

「そう。すると板に書き込んだ内容がパソコンの画面に表示されるの」

「??」

「想像しづらいよね。板と画面の座標が対応してて、板に書き込むフリをすると描いたものが画面に表示されるの」

すると女の子は少し考えてから口を開いた。

「つまり……手は板にあるのに、目は画面を見てるの？ よくそんなので絵が描けたね、昔の人は」

「だから電子画板サマサマなんだよね」

こくこくと頷く女の子。

「今は良い時代になったっておじいちゃんがよく言ってるよ。昔はこんな便利な物なかったっていうし、こんなのんびりした時代でもなかったみたい」

「ミロクさまのおかげね」

「だよねえ～。アルナに足向けて寝れないよ」

「枕、どっち向き？」

「南！」

「あはは」と女の子は楽しそうに笑った。

わたしはお湯を一口飲む。

「今日は泳ぎにきたんじゃないの？」

「うん、海を見に来ただけだから」

「あ、もしかしてアルナ人とか？」

「ううん。地元よ」

「じゃあわたしと同じだね。北方から来た人はあまり泳がないっていうからそう思っちゃった」

「やっぱり海がないから泳げない人が多いのかな？」

「ううん、そういう意味じゃなくて、日焼けするのが嫌で泳がない人がいるってこと。それに紫外線って肌に良くないしね」

「あ、それ聞いたことある。詳しいのね」

「とかいって、実はおじいちゃんの受け売り」

わたしははにかんだ。

女の子はお湯を飲んで一息ついてから、言葉を紡ぐ。

「そういえば、年って同じくらいかなあ。そう思って安心して話しかけたんだけど」

「ぼいよね。わたし、アルソンよ。あなたは？」

「私も私も。こないだ14になったの。やっぱりね。お互い高校生って感じ、したもん」

「鞆とか？」

「うん。ほら、前期大学生になったら鞆って誰かしらプレゼントしてくれるじゃない？ その鞆、高校入学のときのつぼいもん。私にも似てるよ」

「画板とか入るから助かるよ、この鞆」

「あ、それで、わたしは中央カテゴリー高なんだけど、あなたは？」

「私は東カテゴリー高よ」

「そっかあ」

同じ市内だけど別の区か。近いような遠いような。

パン屋なんていくらでもあるから、ウチの宣伝しても意味ないだろうなあ。猫の脚じゃうみ便も圏外かな。うみ10匹に駆伝してもらわないとだわ。

——なんて絵面を想像したら、思わずにやけてしまった。

「休みのたびに絵を描いてるの？」

「週1くらいかな。勉強もしないとだから」

「だねえ。今年は受験だもんね」

「受験かあ。わたしも頑張らないとだわ」

「ってことは中央大ねらい？」

「ま……一応」

「絵で食べていくの？」

「それは無理よお。学問と芸術は違うから」

アルバザード人は芸術が好きだが、芸術だけでは食べていけない。第一芸術家本人が芸術だけで食べようとするのを嫌う。

学問は人類の発展に必要なだが、芸術はそうではない。あれは趣味や余暇の範囲

内で行うのが適切とされている。

「うちのおじいちゃんがよく言ってるわ。人間は何かしら社会を維持するために労力を提供しなければならないってね。お店をやってる人は食糧を売ったり製造したり、オフィスワーカーは書類の処理をしたり。何かしら社会を維持していく努力が義務ってね」

「じゃあ学生の義務は勉強かな？」

「たぶんね。未来の社会を維持するための投資なわけだから。でも、絵描きは違うわ。絵描きがいなくても私たちは食べていけるじゃない？ でも小麦を作る人がいなくなったらダメじゃない？ ユーマの一族もそれまでよ」

「そしたらカルテ神に祈るしかないねえ」

のんびりと女の子が呟く。食料の神様に祈って助けてもらうことを考えているようだ。

「あ、でもそしたら人類は怠けて衰退しちゃうね」と言って人差し指を顎に当てる女の子。

「少しくらいのんびりなほうがいいよ～。最近みんな忙しすぎだからね」

「のんびり屋のカテージユ人がそれ言っちゃうんだ？」

女の子は口に手を当てててくすくす笑った。わたしもつられて笑う。

「あ、でもさ」

女の子が思い出したように言う。

「例えば美術館の職員になれば、芸術がそのまま仕事になるんじゃないの？」

わたしはこくこく頷いた。

「そうなのよ。だから本当はわたし、大きくなったらアルナに行きたいの」

「えっ？ カテージユを出るの？ 移住するって珍しいね」

「カテージユってほら、中途半端に都会じゃない？」

「海があって暖かくて私は好きよ。まあ、夏は暑いけど」

「アルナは世界一の都市だし、ランスケルン美術館もあるしさ」

「ああ、ランスケルンの職員になりたいのね？」

「まーね」わたしは伸びをして一瞬手を休める「でも、実際は無理かも」

「どうして？」と首をかしげる女の子。

「うち、南区にあるの」

「ああ」女の子は分かったように頷いた「家業を継がないとってことね」  
「わたしだけアルナに行くわけにはいかないしさ。おじいちゃんたちにアルナでお店をさせるわけにもいかないし」  
「まあ、家業があれば将来安定してるってところはいいよね」  
「そうね。おかげでわたしはこうして休みにのんきに絵を描いてられるんだし」

まったく話をしていたら、いつの間にか1時間以上経ってしまった。  
「はい、できたよ」  
わたしは着色を終えると、電子画板を女の子に見せた。  
「わあ、きれーっ！ これ、私でいいの？」  
ヘンな言い方する子だなあ。わたしは苦笑しながら「そっくりだと思うよ」と答えた。  
「ありがとう！」  
「じゃ、転送するね」  
わたしが画板を向けると、女の子は左手の腕時計型アンセを伸ばしてきた。データを転送すると、女の子はファイルを開いてしばらく見ていた。

「これ、友達に見せるね。150ソルト、受け取ってくれる？」  
女の子はファルシアンを2枚渡してきた。わたしはポシェットからお財布を取り出すと、アンシーズを1枚手渡す。  
「ありがとう」  
アルバザードでは似顔絵の相場はこの程度と決まっている。こちらから「いくらくらいです」というのははしたないから、お客さんに任せている。  
お客さんは「〇〇ソルト、受け取ってくれる？」という言い方をする。この言い方がアルバザード人の美德だっておじいちゃんが言った。  
たまに外国人が来るけど、外国人は素直に値段を聞いてくるのでこちらも素直に相場を伝える。それはそれでいい。

「じゃ、私いくね。楽しかったわ。これからお昼？」  
「あ、もうそんな時間か。そこの屋台で何か買おつと」  
「じゃあ良いこと教えてあげる」  
女の子は風で舞った砂をスカートから払うと、200メルフィくらい離れたミリア像を指さした。ミリア像は小高い岬のところにある。  
ミリア＝ルティアは籠女海岸の語源になった人で、アシェットの英雄リディア



＝ルティアの妹だ。美人でおしとやかな上に慈悲深い人だったと伝えられている。  
ミリア像はカテゴリーの観光スポットだから、籠女海岸には人が溢れている。

「ミリア像がどうかしたの？」

「あの向こうって行ったことある？」

「そういえば……ないね」

「みんな籠女海岸とミリア像にしか興味がないじゃない？ でも実は、あの向こうにもう一個岬があるの。そこ、人がいなくて景色も最高なのよ。サンセットなんて感動ものだから」

「へえ！ そんな穴場があったんだ？」

「私の秘密の場所なの。でも、あなたには教えてあげる。行ってみて。きっと気に入るわ」

「あなたは？」

「今日はもう帰るの。午後は受験勉強したいから」

「そっか……。じゃあ、気を付けて」

女の子は去っていった。

わたしは荷物を片付けると、屋台に行ってお昼を買った。

その足でミリア像の向こうへ行ってみた。背の高い草を切り開いて作った砂利道があった。静かで誰もいない。風も穏やかで、心なしか涼しい。とてもいい気分だ。

「この向こう、ちゃんと道が続いてるのかな……？」

アンセを開き、衛星から地図を読み込む。

「道路情報はない……か。でもまあ道も開けているし、大丈夫よね。なによりあの子もふつうに行ってるみたいだし」

砂利道が終わると白い砂浜になった。

「わあ……」

そのまま進むと岬があった。ここだ。

岬に立つと、右手にミリア像が見える。人が集まっているけど、みんなミリア像ばかり見ている。

「なるほど、これは気付かないわけよね。穴場だわ」

わたしはシートを広げ、海を見る。

「いい眺め……」

わたしは満足げにお昼を食べはじめた。

「そういえば、うみはどうしてるかなあ。今日はどっちに来てるんだろ。ひなたちゃんのところかな。ひなたちゃん、今度会おうって話になって返事してくるかな」

うみ、わたしがいなかったらハムもらえなくて、またどこかでおさかな盗んだりして。

思わず口に手を当ててくすくす笑う。

「あ、そうだ。ここの写真撮ってひなたちゃんに送ってあげよう」

アンセをかざし、写真を撮った。

「静かだし、音楽でも聞こうかな」

アンセの音楽再生機能をオンにする。

私の好みはゆったりした曲だ。特にこういう夕暮れ時はちょっとくらいしみりする曲のほうがいい。

しばらく休むと、わたしはまた海岸に戻って絵を2,3枚描いた。

それが終わった頃にはもう6時になっていた。

サンセットが美しいって言ってたけど、この季節は見れないだろうなあ。8時くらいまで明るいから。アルナだと9時まで明るいけど、ここは南だから8時ごろまで。

さっきの子は地元の人じゃないのに、どうやってサンセットを見たんだろう。冬場の4時くらいに日没するころに来たのかな。

荷物を片付けると、電車で家に帰った。

今日は楽しかったな。

家に帰ると、うみがクッションで寝ていた。

「すっかり家主だね、キミは」

「なー」

うみの首輪には手紙が付けられていた。ひなたちゃんだ。

会って遊ぶ話、OKしてくれたかな。

ちょっとときどきしながら、メモを開いた。

こよりちゃん  
うみちゃんってお魚食べるんだ？ 面白いね。  
ケーキ屋さん、ぜひ紹介してね。  
来週のパルトは空いてるよ。  
こよりちゃんは？

よかった、会えそう。  
わたしはさっそく返事を書いた。

ひなたちゃん  
わたしも来週は大丈夫だよ。  
待ち合わせして遊ぼうよ。  
あ、そのケーキさんは、クレーヴェル通りのレレゾナ通りなんだけど。

会うの OK だったら今日にすればよかったね。残念。  
今日は何してたの？

「さて、ではうみ君、配達よろしくお願ひします」  
うみは脚で耳をかく。  
「ん？ お代は夕ごはんって言いたいのね。いいよ、ちょっと待ってて」  
うみにご飯をあげて、わたしは居間で家族と夕飯を食べた。  
食べて部屋に戻ったら、うみ便はもう出払っていた。

夜、日記を書き終えてもう寝ようかなという頃、わたしはうみの鳴き声が聞こえた気がして、裏口に回った。  
すると外でうみがわたしを呼んでいた。  
外はまた雨らしい。しとしと降っている。  
雨を嫌ったうみが避難を求めてやってきたようだ。

「おかえり、早かったね。ねこ便は雨天のほうが早く届くって、初めて知ったよ」  
ふふと笑いながらうみを入れる。  
「ひなたちゃんのところには行ったの？」  
うみはまるで答えるように頭を突き出してくる。

首輪には新しい手紙。

うみを拭いてあげたわたしは、手紙を開いた。

こよりちゃん

うん、あそぼう！

じゃあ今度のパルトの正午に、レレゾナ駅のアーチのところで待ち合わせでいい？

あ、それと、ケーキ屋さんのあと、籠女海岸に行かない？

私、よく行くの。実は今日も行ってきたんだ。

「うそっ！？ わたしもだよーっ！」思わず声が出る「えー、じゃあ、あの人がごみの中にひなたちゃんがいたんだ」

驚きながら、続きを読む。

ミリア像の近くに眺めの良い穴場があるのよ。

そこ、紹介してあげる。

「……ん？ それってさっきの穴場のこと？ ひなたちゃんも知ってたんだ」

あれ……？

なんか……違和感があるな。

あそこってそんなに有名なんだろうか。

あ、紹介で思い出したけど、海岸に感じのいい絵描きの女の子がいるのよ。

今日、似顔絵を描いてもらったの。

今度その子も紹介してあげる。こよりちゃんも描いてもらいなよ。

「え……？」

思わず眉をひそめる。

そうだ。待ち合わせするなら、私の顔を知らないとかだね。

さっき描いてもらった似顔絵をアップしておくから、アクセスしてみてね。

そして手紙の最後にはアドレスとパスワードが書いてあった。

「まさか……」

わたしは恐る恐るアドレスにアンセをかざし、ファイルを開いた。

「——！」

うみはわたしの気も知らず、クッションの上ですやすや眠っている。

わたしは驚いて放心していたんだけど、ふつふつと運命的なものを感じだした。

「え……でもなんで？ あの子、東カテゴリー高って言ってたよね」

ハッとするわたし。

「そうか……ひなたちゃん、東区住まいでラヴァ通りだから、中央カテゴリー高より東カテゴリー高のほうが近いんだ」

自分が南カテゴリー住まいなのに中央カテゴリー高に行っているものだから、すっかり勘違いしていた。

しばらく静かな驚きの余韻に浸っていたわたしだったけど、やがて返事を書きだした。

ひなたちゃん

ねえ、運命って信じる？ わたしは信じるようになったよ。

ねこの郵便屋さんが来たのも運命だったんじゃないかって思うよ。

なんの話かって？

あのね、わたしもその絵描きさん、知ってるの。

描いてもらったこともあるのよ。

——鏡の前で。

クッションの上で寝ているうみを起こさないように、静かに手紙を首輪に付けた。

うみは薄目を開けてわたしを見た。

ために「なー？」と言ってみたら、「なー」と返事をした。

「おつかれさま。また明日も配達、よろしくおねがいします」

わたしは微笑んで、うみを優しく撫でた。

「ねこの郵便屋さん。お代はごはんと暖かいクッションで。

配達は早ければ1時間。遅くて翌日。  
あなたもいかが？ ……な—んて」

—終